

九州大学開学記念日貴重図書展示会展観目録：九州大学文学部所蔵

九州大学附属図書館中央図書館

<https://doi.org/10.15017/1495098>

出版情報：展観資料，pp.1-17，1980-05-10．九州大学附属図書館
バージョン：
権利関係：

九州大学開学記念日貴重図書展示会展観目録

(九州大学文学部所蔵)

日 時 昭和55年5月10日土曜日 午前10時～午後4時
場 所 九州大学附属図書館 1階 自由閲覧室

九州大学開学記念日貴重図書展示会展観目録

(九州大学文学部所蔵)

1 古今和歌集

大本二十卷二冊 嘉禄本系統 伝広憧筆 室町初期写
墨付上册五十七丁、下册六十一丁。奥書に「以幡多旅店御筆書写之。尤可為証本者。」とし、「桃竹」の署名と花押がある。古筆の極めには連歌師広憧の筆とするが、各伝未詳。墨滅歌十一首を附載し、本文には勘物と、朱の合点および声点を処々に付するのは注目される。

2 伊勢物語能愛抄

大本一冊 能愛法師著 元禄十五年(1702) 仲原直秀写
能愛は武蔵国北野天神の神官というが、詳しくは分らない。奥書によれば、梶井宮盛胤親王に受学、幽斉の闕疑抄なども参考にして本書を著わした。後水尾院の「伊勢物語講釈」を旨としている。他にこの書の所伝を聞かない。

3 自讃歌注

枳形本一冊 大永二年(1522)写 伝定法寺応猷大僧正筆 外題伝近衛信尹筆
「自讃歌」は鎌倉時代に編まれた歌集で、「新古今集」の歌人十七人の秀歌を各人十首ずつ集めたもの。「自讃歌注」は、それに宗祇が加注したものと言われるが、異本が多い。本書もその一つで、成立は宗祇の時代よりはやや遡りそうである。奥書はない。

4 竹取物語

三巻 近世中期写 奈良絵各巻二面を有する。奥書はない。
「竹取物語」の絵巻は現存物少く、本書も書写年代は比較的新しいが貴重。掲出し

たのは周知の、かぐや姫が月の世界へかえってゆくところである。

5 源氏物語

大本五十四卷三十冊 古活字十一行本 無刊記 元和ごろ刊

「源氏物語」の古活字本は各種あるが、この本は「弘文荘古活字版目録」（昭和四十七年）にはじめて収載された元和中刊本（久邇宮家旧蔵）と同版であり、極めて珍しい。

6 手鑑 某氏所蔵

一帖 二十五折 断簡百五十二点収載

折本仕立てに古筆の断簡を貼り集めた物を手鑑というが、本帖は点数がすこぶる多く、しかも近世以降のものはごく少い。中には国宝級手鑑の断簡のツレと見られる物も含まれている。掲出の定家の切は、真筆であろう。また伝行能筆の「建礼門院右京太夫集」巻頭の断簡も、南北朝期のもので珍しい。

7 三島千句

柵形本一冊 大永五年（1525）写

連歌師として最高峰に位置する宗祇は、自分ほど数多くの独吟をしたものはいるまいと述べているが、その宗祇独吟の中でも最も著名なものがこの「三島千句」である。文明三年（1471）三月、相模国三島社法楽の独吟千句で、本書はその五十年程後の筆写。書写者は不明。

8 ^{ふしなにき} 賦何木連歌

百韻一卷 天文廿一年（1552）三月十一日興行

三好長慶の「山かけて都やさかり花の春」を発句とする百韻である。一座の連中は師匠格の昌休・宗養を初め紹巴等専門連歌師を含めて十五名。政略家として知られる長慶はこの年範長から長慶と改名し、天下の実権を握っている。その気分で詠まれた発句でもあろうか。

9 ^{わくらば}老葉 宗長註

横本二卷一冊 天正十九（1591）年写

「老葉」は宗祇第二の自選句集で、文明十三年に初編が成り、後文明十七年に再編が成立した。宗祇の代表的句集。宗祇の自註を加えたものがあるが、その後弟子宗長による註釈がなされ、本書はその天正十九年の写本で、宗長序を欠く代りに逍遙子（三条西実隆）の跋があり、室町末写といわれる蓬左文庫本につぐ。北田紫水旧蔵

10 熊野の本地 奈良絵本

大本二卷二冊 近世初期写

熊野権現が印度から日本に垂跡した由来をつづったもの。御伽草子の一で、本地物とよばれるジャンル。奈良絵本は絵巻から変形したもので、披見に便利な様に冊子型となったもの。初期のものは本書の如く書型も大型で、本文が絵組の中に入りこんでいるものが多い。

11 文正草子 奈良絵本

横本三卷三冊 寛文（1661～1672）頃写

鹿島神宮の雑色文太が塩焼きから大納言に立身出世する迄を描いた御伽草子、立身出世物の代表作。祝儀物として正月の読初めに用いられたりしたので伝本は御伽草子中恐らく最も多いものの一つ。本書は草子屋の手によって量産された普及版奈良絵本の典型的なものである。

12 ^{たいしよくわん}大職冠 古活字 丹緑本

大本一冊 元和・寛永頃（1615～1643）刊

謡曲「海女」で著名な竜宮の玉取り伝説の幸若舞曲である。古活字の丹緑筆彩本は版本の歴史の上でも極めて珍らしく、本書はその絵が十七面もあって特に珍重すべきもの。丹緑本とは、墨板の絵の上に丹、緑、黄（後には紫も用いる）の筆彩を極く簡略に施したもので、筆者は本格の画師などではなく、恐らく

本屋が恣意的に施したものだろうといわれるが、それが却って古拙な味を出していて珍重される。

13 日本永代蔵

井原西鶴作 大本六卷六冊 貞享五年（1688）刊

西鶴町人物の第一作として名高い。副題の「大福新長者教」に示される如く、新らしい長者になり様を教える為のもの。本書は貞享五年板本の後印本の一で、初板では奥附の「金屋長兵衛」の次に「江戸西村梅風軒」の一行があったものを削っている。「永代蔵」にはこのような後印本や異板が多く、以て本書がいかに世間に迎えられたかを知り得る。

14 世間^{むねざんよう}胸算用

井原西鶴作 大本五卷五冊 元禄五年（1692）刊

西鶴晩年の町人物の内でも傑作と評される本書は、また元禄六年に没した西鶴存生中に刊行された最後の作品でもある。「大晦日は一日千金」の副題に示される通り、商人にとっては一日千金にも換え難い大晦日の攻防の中に人間の哀れさとおかしさを見事に描いている。難波西鶴と署名された序文はまた西鶴自筆を板下に用いたものであろう。

15 太宰府賦并序

斗丈撰 言道筆 絹本一卷 安政五年（1858）写

菅公の遺徳をしのび、天満宮を中心とする近在の名所旧跡を綴る。撰者斗丈は俗称三角勘三郎。秋月の元結商で俳諧に名あり、又熱烈な勤王家でもあった。この文はその面影を伝えてもいよう。言道は安政五年大坂中之島の居宅にこの筆をとったことが、巻末識語に見える。

16 古今和歌集（附点・注記本）

二十卷三冊 室町末期頃写

本文に朱・墨の声点、濁点、多数の傍訓有り。各冊に奥書数種有り。下冊の最終奥書

「永正八年癸九月十五日 前関老人」

17 金剛頂瑜伽蓮華部心念誦儀軌長承三年点

大本一冊 長承二年（1133）写 同三年加点

本文の文字に付された豊富な朱・墨の訓・点（ヲコト点・声点）は、平安末期の国語資料として貴重。ヲコト点は、西墓^{にしはか}点。

18 大聖妙吉祥菩薩秘密八字陀羅尼修行曼荼羅次第儀軌法元永二年点

粘葉装一冊 平安朝末期写 元永二年（1119）加点

朱点（ヲコト点、仮名点、声点）が差されている。ヲコト点は第三群点の三論宗点。

19 大聖妙吉祥菩薩秘密八字陀羅尼修行曼荼羅次第儀軌法永久五年点

粘葉装一冊 永久三年（1115）写 同五年加点

朱による訓点と朱・墨による仮名、更に朱による反切注・義注が付されている。ヲコト点は第五群点中の池上律師（浄光房）点と殆んど一致する。

20 大毗盧遮那成仏神変経卷第二天承二年点

粘葉装一冊 平安朝後期写 天承二年（1132）加点

朱点（ヲコト点・仮名点・声点）、墨点（仮名点）が差されている。ヲコト点は西墓点（第一群点）。

21 錦繡段抄

五卷五冊 大 寛永廿初春（1643）刊

唐宋元明の詩を集めた『新選集』（江西竜派編）・『新編集』（瑞巖竜惺・慕哲竜攀編）の二集から天隠竜沢（明応九寂1500）が抜萃編纂した『錦繡段

』に、月舟寿桂（天文二寂1533）が注し、更に継天寿戡（生没年未詳）が増補した抄物。中世の俗語が多く見える。

22 無門関抄

(I) 二巻一冊 大 寛永二 乙丑霜月吉辰（1625）刊

(II) 二巻一冊 大 寛永十四丁丑夷則吉辰（1637）刊

(III) 二巻二冊 大 慶安元戊子孟夏吉旦（1648）刊

禅門で尊重された無門関四八則（無門慧開著、南宋紹定元年1228刊）についての抄。(I)と(III)はほぼ同文の版。武蔵東竹院四世雪庭春積（寛永四寂1627）の抄。(II)は、万安英種（承応三寂1654）の抄とされる。抄文中に「ダ」「タラウニハ」などの関東の方言が見出されるいわゆる関東系抄物の一。

23 来島文書

三巻 建暦元年（1211）～正保二年（1645）

肥前国北松浦郡大島（平戸島の北）の豪族大島氏（来島氏）の伝来文書。大島氏は肥前国宇野御厨の庄官クラスの出自で、鎌倉時代には御家人、江戸時代の初めに大島を出て福岡藩士となった。本文書は松浦党関係文書として知られる。展示箇所は弘安の役のと蒙古の襲来に備えて肥前国の島々に烽火を用意させた肥前守護北条定宗の書下である。

24 草野文書

三巻（うち一卷は系図） 文永十年（1273）～安永八年（1779）

筑後の豪族草野氏の伝来文書。草野氏は本姓藤原氏、肥前国在庁官人の流れで竜造寺氏などと同族。鎌倉時代から戦国時代に至るまで筑後・肥前で勢威を振った。展示箇所は、和歌・連歌でも知られる九州探題今川了俊が出した書下である。

25 鳥浜文書

一卷 元徳三年（1331）～暦応三年（1340）

鳥浜氏は大隅国禰^ね寝院北俣を本拠とする藤原姓禰寝氏から分出し、鳥浜の地名を負うた小在地領主の系譜を引くもの。本文書は中世島津庄大隅方寄郡禰寝院北俣の実態を究明するのによい史料である。展示箇所は元徳三年十一月十九日沙弥行智護状。

26 清末文書

四卷 応永二十一年（1414）～寛永五年（1665）

宇佐八幡宮領到津庄（北九州市小倉区）清末名の名主で同庄到津八幡宮社司清末氏の伝来文書。清末氏の代官支配のあり方や清末名々主としての存在形態が知られる。展示箇所は天文廿一年三月十二日二郎四郎子息徳あみ売券で、飢饉による人身入質文書として知られるもの。

27 小串文書

四通 31.0 cm × 47.7 cm 建武五年（1338）～暦応二年（1339）

本文書は小串氏の日向における軍事活動を伝えるもので、すべて足利直義（尊氏の弟）の感状である。展示文書は小串弥四郎重行が畠山義顕（後に直顕）に従ってたたえた軍功に対する感状。小串氏は室町幕府の奉行人として知られる。

28 蒲池文書

三通 13.0 cm × 45.2 cm 戦国末期

蒲池文書の主要なものは現在広島大学に所蔵されており、本文書は元来それと一具のものであったろう。蒲池氏は宇都宮氏の支流で、筑後の在地豪族として鎌倉時代から知られ、竜造寺氏に滅ぼされる。展示文書は蒲池勘解由使あて大友宗麟書状である。

29 八雲ノ伝之内奥旨口訣

一卷 天文十二年（1543）

八雲の伝とは素佐之男命の「八雲立つ」の和歌の解釈であり、神道伝授に関するものであるが、近世初期には古今伝授中の一伝授となっている。筆者の卜部兼右は唯一神道の開創者である兼俱の曾孫に当たり、京都吉田神社の社務を世襲した。

30 立花宗茂（立斉）自筆書状

一軸 31.2 cm × 44.6 cm 近世初期

宗茂は戦国大名大友氏の支族立花氏の武将。豊臣秀吉から筑後柳川十三万石に封ぜられた。関ヶ原の戦いでは西軍に属したので領地を没収されたが、大坂の陣の軍功により旧領柳川十万九千石を回復している。この書状は文中に「愚老」とみえるので、宗茂晩年のものであろう。

31 島津日新斉（忠良）教訓写

一軸 28.4 cm × 73.4 cm 近世初期

日新斉は戦国大名島津氏の武将。島津氏中興の祖とされている。日新斉は神儒仏に傾倒した武将であつたらしく、児孫や家臣の薫陶に力を尽している。孫の義久に与えた、この教訓もその一環とみられ、日新斉の経世済民の志がうかがわれる。

32 公家衆御消息

一卷 近世

中世末近世初期の名筆家として知られる近衛信尹をはじめ、近世の名筆家をもって知られる花山院愛徳など、近世公家の消息十四通を成巻したもの。箱書によれば法隆寺伝来のものであった。展示箇所は近衛信尹の消息。

33 女鏡秘伝書 (奈良絵本)

横本二卷二冊 元禄頃(1688~1704)写

近世初期、社会の変動と共に人間の生活理念も大きく変って、儒教道徳が社会万般に浸透し始める。その平易な伝達を主目的としたのが仮名草子とよばれる分野には特に多かった。女性教訓を「女訓物」とよぶが本書もその一つ。成立は近世初期であるが従来その名は有名であるにも拘らず、伝本は極めて少ない。

34 肉筆道中図

折本一冊 紙本着色 35.8cm×67.2cm 近世前期

近世前期における長崎から江戸までの参勤交替のコースを記す道中図である。江戸の六郷大橋(元禄元年(1688)流失後、架橋せず)や道中の御殿・御茶屋(本陣に先行する幕府・大名直営の宿舎)などが記されているので、少なくとも貞享年間(1684~88)以前の成立とみられる。幕末まで用いられたらしく、随所に書き込みや貼紙がなされている。

35 海陸世話日記

大本二卷二冊 享保二年(1717)

加賀国吉崎(現福井県)の船問屋長屋与四郎が寛文八年(1668)の六月から十二月にかけて経験した、甚だ波濤に富んだ海事裁判の顛末を認めた書物である。南部地方の八戸付近への漂着に始まり、陸路江戸へ向かい、二箇月余にわたる裁判に一応の決着をみて東海道を経て帰国するまでが記されている。

36 世界人物図巻

一卷 紙本着色 近世末期

大明人をはじめ世界四十箇国の人物を描き、国ごとの地理・民族・物産などを記したものである。筆者の城義隣については生没年など不詳であるが、他に長崎港を描いた泥絵もあるので、長崎絵師城氏の一人と推定される。展示箇所はイスパニア・ポルトガル・イタリアの部分である。

37 長崎絵踏資料

十五通 右 25 cm × 27 cm 延享～弘化(1744～1847)
左 26.5 cm × 21 cm

キリスト教が全面的に禁止されていた江戸時代では、毎年宗旨改めが行なわれ、役人立会いの下に踏絵をふみ、キリシタンでないことを証明しなければならなかった。この史料は長崎市中の者が他所へ移住するに際して、キリシタンでないことを、居住地の町の乙名が転出先あてに保証したものである。

38 申紅毛壺艘切本帳

小横帳一冊 近世後期

江戸時代の対外貿易は鎖国以後長崎に限られ、オランダ船・中国船のみを通して行なわれた。本帳はオランダ船に積んで来た布地の商品見本であり、脇に入札者と入札値が書き込まれている。

39 出島・唐人屋敷出入札

二点 天保十年(1839)

出島は鎖国体制下にあって海外に開かれた唯一の窓口であった。出島には長崎市中と同じく出島乙名が任命され、この島への日本人の出入は厳重に取締られた。この出入札はその入門許可証で、取締りの実態を示す貴重な資料である。

40 島原の乱に関する大坂城代等の書状

一通 寛永十四年(1637)

島原藩主松倉氏の苛政と幕府の禁教政策に反撥して、島原・天草の農民等が大反乱を起こした時、幕府は早速、近隣の諸藩にその対応策を指示した。この史料は、その際、大坂城代阿部正次らが熊本藩家老長岡監物らに宛てた指示の書状である。

41 当座帳

小横帳一冊 文化二年（1805）

本帳は天領天草郡御領村の特権商人石本家の一年間の商業活動を記したものである。石本家文書には明和年間（1764～1771）から明治末年（1911）まで全部で五十九冊の当座帳が存在する。江戸時代から明治年間にかけての商家経営・商品流通を究明するうえで貴重な史料である。

42 田畠作得請取帳

長帳一冊 文政十二年（1829）

天領天草の特権的御用商人である石本家は、商業・土地・醸造・蠶繅等、大規模な多角的経営を行なった。本帳は、同家の土地経営、特にその所持田畠からの収益の明細を記したもので、文化～天保年間（1804～1843）の帳簿三十二冊が現存する。

43 筑前国福岡城図

一軸 紙本着色 80cm×100cm 近世初期

慶長五年（1600）筑前に入国した黒田長政は、那珂郡警固村の福崎に福岡城を築いた。本図は三代藩主光之時代のもので、北方の濠に面した現在の平和台一帯の地域に重臣たちの屋敷が立ち並んでいる様が知られる。

44 筑前国夜須郡依井村^{本田畠 新田畠}御検地帳

一冊 慶長七年（1602）

福岡藩は慶長七年（1602）から本格的な検地を実施した。検地帳は検地の結果を記載したもので、年貢・諸役などを賦課する基礎的帳簿である。これは村単位に作られ、耕地一筆ごとに、その所在小字名・種類・等級・面積・作人が併記されている。

45 黒田家譜

十六巻 貞享四年（1687）

黒田家譜は、福岡藩主黒田光之の厳命をうけた貝原益軒が、寛文十一年（1671）より延宝六年（1678）までの調査で十三巻を編述、ついで貞享四年（1687）旧本を補訂して十六巻本として完成、その間、実に前後十七年の長年月を要した。その内容は、黒田高政にはじまり長政の没年までを誌す。

46 地所取調帳

四冊 明治八年（1875）他

明治六年（1873）、政府は地租改正法を發布して、旧制の貢租全廃、地価調査、地租基準などを定めた。これにより、福岡県下では同八年（1875）五月「地所取調帳」が完成したが、同二十一年（1888）「総丈量野取図帳」、翌二十三年（1900）「修正地価帳」が作成されて、土地制度の整備がはかられた。

47 史 記

慶長（1596～1615）刊。漢司馬遷撰 劉宋裴駟集解
唐張守節正義。百三十卷四十八冊（うち巻二、四十一、年表欠）。いわゆる慶長古活字本である。毎頁八行、行17字。

48 莊子三種

(1) 南華真經

朝鮮刊。十巻十冊。莊周撰 晋郭象註 唐陸徳明音義 宋林希逸口義
「莊子」を「南華真經」と崇称するのは唐代からである。林希逸の口義は、儒家と道家の合一をめざしたいわば儒家がわからの「莊子」解釈である。わが国で最も博く読まれたのはこの書である。

(2) 南華真經副墨 (座春風文庫)

明萬曆十三年(1585)刊 八卷三冊(うち一・二卷欠) 莊周撰 明陸西星註

この書は道教丹鼎派の開祖である潜虚真人陸西星の撰で、これを太初散人孫大授が重校したもの。「莊子」はさまざまな立場から注解されてきたが、これは道教の立場から注解した名著。稀観本。

(3) 南華經 (座春風文庫)

明刊 七卷四冊 莊周撰 明潘基慶集註

「莊子」三十三卷は内外雑の三部に括られ、その内七篇のみが莊周の自著とされる。本書は外雑篇を内篇の附録とみ、最終卷の天下篇を自序としたうえで、内七篇のそれぞれに外雑諸篇の一二を附載する特殊な形式を示している。「莊子をして莊子を語らしめる」ねらいである。稀観本。

49 安東省菴仁義解 対幅

安東省菴(1622～1701)

名は親善、号を省菴または恥斎。柳川の人。当時貝原益軒とともに「西海の巨儒」と称された。長崎に僑居した明の遺臣朱舜水との親交でも有名。「省菴先生遺集」十二巻がある。「仁義解 対幅」は「省菴先生遺集」巻四の「五常説」を踏まえたもの。

50 茶湯図

一幅 絹本墨画 仙厓筆 (文学部中山文庫)

井出要斎という人物が初釜のために何か描いてくれと言う。そこで仙厓、釜には新年の水、炭は去年の池田炭(最上質の炭)であるからさぞやよくおこり、初釜が千代の松原から吹く松風のようなところよいひびきがすることであろう、と言う。絵は軽妙な筆致。七十五歳の時の作品である。

51 天神図

一幅 絹本墨画 仙厓筆 (文学部中山文庫)

太宰府天満宮は、菅原道真をまつり学業の神様として有名である。藤原氏の讒言によりこの地に流され、死後、雷神となって、京の清涼殿に雷を落したという伝説の持ち主である。この仙厓の筆になる天神図は、道真を雷の親戚のようなかっこうに描き、力ある筆使いで瀟灑な画風を示している。

52 えびす鯛をおさえる図

一幅 紙本墨画 仙厓筆 (文学部中山文庫)

鯛つりえびすは、一般によくある画題だが、このようにえびすが鯛を押えている図は珍しい。えびすが釣ったばかりの鯛を誠に嬉しそうに押えている。筆致はす速く、えびすの指先や衿元、鯛のひれのとがりが目を引く。単に鯛をかかえる図より、幸福の追求といったものが感じられ、えびすの庶民的で喜色満面の容姿がその真剣さを柔らげている。

53 釈尊降誕図

一幅 紙本墨画 仙厓筆 (文学部中山文庫)

釈迦が生まれた時、自ら七歩進んで「天上天下唯我独尊」と唱えると、天竜が温涼二種の清浄水を注いだという。この図では、生まれながらにして悟った偉大な釈迦に、衆生の極楽往生を願う言葉を託している。仙厓晩年の作で、機知に富んだ彼独特の作風とは一味違う趣をなしている。

54 犬の図

一幅 紙本墨画 仙厓筆 (文学部中山文庫)

土用は、一年のうちで最も暑い時期である。この時期には、ひとは精力が失せ、いざなぎの神も、「そのこと」を控えたであろうか。ましてやただの人間は……ということであろう。卑猥になりがちな内容を、神と犬を結びつけて実にさりと言っている。絵も同様に、一對の犬をいかにも無難作に描いて、仙厓

独特の開け広げのユーモアと人間愛を感じさせる作品となっている。

55 群 蛙 図

一幅 紙本墨画 仙厓筆 (文学部 中山文庫)

蛙が、横一列に並んでいる。蛙は、坐禅よろしくいつも坐っているが仏になることはないだろう。仙厓は、自分も唯の人でしかないと言う。彼はここで、禅堂で坐禅を組む坊さんを嘲笑しているのか、それとも仏になれぬ己を嘆いているのか。いや、何者でもない自分自身を誇っているのではないだろうか。

56 鯛釣りえびす図

一幅 紙本墨画 仙厓筆 (文学部中山文庫)

破顔のえびすが、鯛を抱えた様を描いたものである。七福神や鍾馗などの流行神は、仙厓の作品の主要なレパートリーの一つである。鯛とえびすという定型の図ではあるものの、仙厓らしい軽妙飄逸な筆法で、おどけた明るさに満ちている。朱印は、義梵と読める。

57 寒山拾得図

一幅 紙本墨画 仙厓筆 (文学部中山文庫)

中国に、寒山と拾得という仲の良い風狂の禅僧がいた。二人は世のしがらみにとらわれることなく、自由奔放に振舞ったという。この作品では、知己の気心も知れた磊落な交歓振りが巧みに表現されている。

58 猫の恋図

一幅 紙本墨画 仙厓筆 (文学部中山文庫)

猫が鳴いている。まるで恋でもしているかのように悲痛な声で鳴いている。その鳴き声を聞いているうちに仙厓は、この猫が「南無妙法蓮華経」と題目を唱えて、仏に祈っているように思えたのであろう。はたして、このいじらしい猫の恋は、叶えられただろうか。

59 観世音図

一幅 紙本墨画 仙厓筆 (文学部中山文庫)

結跏趺坐する白衣観音の図であるが、この画題は仙厓が仏画のうち最も好んだものであった。文化十一年(1814)、仙厓六十四歳の時、虚白院に隠棲していた時期の作品である。しかし、彼独特の奔放な筆致に欠け、筆跡も他の作品と比べると繊細さがみられることから、仙厓の真筆であるかどうか疑わしい点もある。

60 松囃子稚子舞図

一幅 紙本墨画 仙厓筆 (文学部中山文庫)

仙厓六十八歳の作。松囃子は博多商家の年賀祭りで、稚子・三福神を先頭に笛・鼓・太鼓ではやし、手踊りを加え城内にくり込んだといわれる。稚子のいけない舞姿と年賀のめでたさを喜ぶ庶民の姿に心動かされ描いたものだろう。仙厓の豊かな目にとらえられた博多風俗のひとつとして興味深い。

61 遊紫霞玄海玉几島図

一幅 紙本墨画 仙厓筆 (文学部中山文庫)

机島は、玄海島の東に位置し、対岸には高祖栄西禅師ゆかりの韓良郷がある。仙厓が好んで描いた天工の景勝である。歌集『捨小舟』にもしばしば詠み込まれ、文政十二年(1829)に描いた「玄海几島図」には、風涛で岸下に没した島頂の観世音碑が、近浦の漁民たちによって引き揚げられたことが伝えられる。

62 白衣観音図

一幅 絹本墨画 仙厓筆 (文学部中山文庫)

白衣をまとった観音菩薩が洞穴の中の岩上に坐して瞑想にふけり、かたわらには楊柳が置かれている。仙厓の仏画は初期の細筆白描風のものから晩年はかなり奔放な筆致のものへと移っている。本図は刷毛描のタッチの伸々とした画風を見せており、彼の晩年の画境の冴えをうかがわせる秀作となっている。

付 1 仙厓和尚略伝

仙厓和尚は、寛永三年（１７５０）濃州に生れ、百堂、虚白等と号した。宝暦十年（１７６０）十九歳のとき清泰寺空印和尚のもとで得度し、明和五年（１７６８）月船和尚を東輝庵に訪ね、多年、師の薫風のもとに修行にはげみ、印可をうけるまでとなる。寛政元年（１７８９）三十九歳のとき、聖福寺住職盤谷紹適に請われ、第二十三世の席を継ぐ。その人となりは、寡言 少欲、弊衣垢納、衆と共に修行につとめ、法席は盛んであったといわれる。文化九年（１８１２）六十三歳の時、弟子堪元に席を譲り、虚白院に隠居する。五十歳より画芸をまなび、その詩才とあいまって、独自の境地を墨蹟にたくして表現している。天保八年（１８３７）八十八歳で没した。

付 2 中山文庫の仙厓墨蹟について

中山文庫は、九大医学部名誉教授中山森彦、平次郎両氏の生前の所蔵品からなり、昭和三十四年に、妹にあたる小春氏によって文学部に寄贈されたものである。この文庫に収められている百五点にのぼる仙厓和尚の墨蹟は、兄の森彦氏の蒐集によるもので、氏の死後そのまま文学部にもたらされた。氏は臨床医学が専門で、その傍ら美術・工芸にも造詣が深く、特に仙厓蒐集は早く大正時代にまでさかのぼり、その先駆と言ってもよいであろう。森彦氏自らの目を通して蒐集され、他に散逸していないことが貴重である。